The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	キェルケゴールの女性論
Author(s)	池田, 美芽
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49392
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【61】

氏　　名	池田（森田）美　芽（いけだ もりた み め）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２５２７　号
学位授与年月日	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**キェルケゴールの女性論**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　中岡　成文 （副査） 教　授　須藤　訓任　　准教授　本間　直樹 奈良産業大学教授　花岡　永子

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は序と結論以外に、以下の６章１１節からなる。第１章キェルケゴールをフェミニスト的に解釈するとは何か、第２章キェルケゴールの生涯における女性の意味――日記と伝記的事実より（第１節キェルケゴールとレギーネ――その関係の再考察、第２節現実の婚約とレギーネとの関係、第３節レギーネ関係の問題性）、第３章初期著作「女性のより偉大な才能の弁護」における女性論、第４章仮名による諸著作における女性論（第１節『受取り直し』と『畏れとおののき』におけるレギーネ関係の問題、第２節文学批評――「二つの時代」における女性の問題、水平化と平等、第３節『ある女優の生涯における危機とある危機』における女性的なもの）、第５章女性は実存しうるか――諸段階説における女性論の問題性（第１節実存の諸段階における女性論の問題　美的段階、第２節実存の諸段階における女性論の問題　倫理的段階、第３節実存の諸段階における女性論の問題　宗教的段階）、第６章『不安』と『絶望』における女性性の問題――身体、心、性（第１節『不安の概念』における人間把握と女性の不安に占める位置、第２節『死に至る病』における女性的絶望と男性的絶望の意味）。

まず序において、①女性は男性にとって他者でありうるか（精神としての他者性を持っているか）、②女性は実存しうるか、また女性においても自己の受取り直しの弁証法が成立するか、③実存する主体性同士の共同性がそこに成立するかという、３つの主導的問いが提示され、以下ではこれに対する回答が模索される。

第１章では、キェルケゴールに対する諸家のフェミニスト的解釈が検討される。

第２章では、キェルケゴールが婚約破棄を含めてどのようにレギーネと関わったかを詳細に分析・解明し、そこに改めて彼の思想と作家性を読みとろうとする。

第３章では、従来ほとんど顧みられなかったキェルケゴールの最初の作品である「女性のより偉大な才能の弁護」を中心に、彼がなぜ同時代人Ｊ・Ｓ・ミルとは対照的に、現実社会での女性解放を忌避したかが問われる。

第４章では、『受取り直し』と『畏れとおののき』など、キェルケゴールが前期において発表した仮名著作における女性論が解明される。その中で、彼の実存の弁証法的運動とは単純な上昇ではなく、悪魔的なものへの引き戻しないし閉じこもりの可能性との絶えざる戦いであったことが示唆される。

第５章では、女性の実存が可能と考えられていたか否かが、いわゆる美的、倫理的、宗教的という実存の３段階に分けて論じられ、基本的には男性だけが真正の内面性を表現しうる存在とみなされる反面、神を「中間規定」としつつ他者を他者として「受取り直してゆく」根源的な可能性も想定されていると指摘される。

第６章では、キェルケゴールが基本的にはエロス的なものこそ罪の原因とみなしていたことなどを確認しつつも、女性的な愛や共感、励ましが他者との共同性を築きうること、そこにおいて神関係と他者関係が相即しうることが示唆され、その点に希望が見いだされる。

論文審査の結果の要旨

キェルケゴールの実存論は孤独で厳しい宗教性の主張である反面、女性の宗教性を直接的で浅薄なものに見下していると受けとめられてきた。しかし近年のフェミニスト解釈は、こうした従来のキェルケゴール像に新たな視点を加え、女性の宗教性や実存のうちにこれ

までキェルケゴールに欠けるとされてきた他者との「共同性」を発見した。本論文はこれらの先行研究を詳細に比較検討したうえで、レギーネとの関わりという根源的出来事に対する独自の評価・解釈を突破口とし、キェルケゴールの女性論と重なり合う実存論、とりわけ「第二の倫理学」論の意義に新しい光を当てようと試みた労作である。議論の中でも哲学的な射程が広いと思われるのは、神が単独者に恩寵を与え、受取り直しを可能にする、基本的に「対話的」な存在と位置づけられていることであり、この視点はキェルケゴール研究や実存哲学研究の枠を超えて一つの思想的方向を指し示しているであろう。

その反面、誤記・誤植などが散見されるほか、キェルケゴールの実存弁証法とヘーゲル弁証法との相異が必ずしも明確に踏まえられておらず、後者の「移行」や「想起」概念に対する前者の「飛躍」概念の特質が十分に論旨に反映されているとはいえないこと、申請者の個人的信念とも交差する「神の恩寵による実存的飛躍」の可能性が必ずしも十全な哲学的説得力をもって展開されていないこと、フェミニスト的解釈の諸側面（書き手としての女性と読み手としての女性、男女の差異を超えた主体性の可能性など）についての議論が十分に尽くされたとはみなされないことなど、さらなる充実を要する点も少なくない。しかしながらこれらは、キェルケゴールの実存論を現代女性論の観点から鋭く掘り下げた申請者の努力にさらなる思想的熟成が加わることにより、十分な補正を期待できる性質のものである。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。